Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

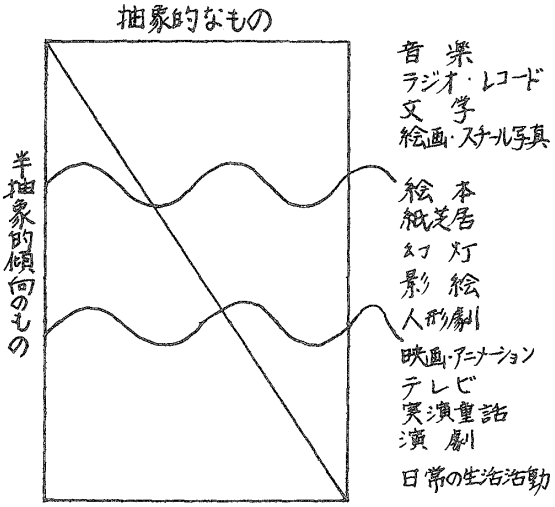
絵本における半抽象性について

○宗宮圀子（京都女子大学）　棚橋美代子（中京女子大学）　村榮喜代子（京都女子大学）　古井桂子（九州龍谷短期大学）
若林百合子（大谷大学短期大学部）　溝手恵里（倉敷市立短期大学）　日高裕子（キリスト教保育専門学校）　中川正文（京都女子大学）

絵本が、さまざまな文化財のなかで、どのような位置を占めるか、どのような特質をもつものであるかを考えたい。

幼児の文化的環境としての児童文化財や教材には、種々のジャンルや段階がある。

たとえば、その性格について具体性と抽象性の分野に限っていえば、次のとおり整理することができる。



この図は、周知のように具体性と抽象性の「かねあい」つまり関連をあらわしたもので、具体的なものが逐次少なくなるに従って、抽象的領域が増加することをあらわしている。幼児にとっては、当然さまざまな文化財を偏向することなく、バランスのとれた経験を用意することが必要である。

たとえば、現在の文化的状況のなかで、極めて経験量の多いテレビは、いわば具体的なものを代表するといっていい。知られているとおりテレビは、単に「見ること」だけで内容が容易に理解でき、正確なイメージがひろげやすい。その点個人差なく、同時に多数に同一の内容が伝達できる。理解のエネルギーを必要としないために娯楽性も高く、確実に正確に興味深く理解せしめることができる。

しかし一方、一瞥すれば容易に理解できるために、殆ど思考の過程を必要としない。理解のエネルギーを必要としない安易な態度ができる可能性が強い。一方的に送られてくるので受動的に受けとるだけという姿勢ができてしまう。

それらテレビ文化に対応するものとして一般に本――つまり文学に親しむことが重視されている。

なるほど文学は、極めて想像力を必要とするだけに知的な複雑微妙な内容を享受する態度と能力を身につけさせてくれるが、このように抽象性の強いものは、幼児のそれまでの経験や環境などの違いにより、理解の仕方やイメージが異なるため必然的に個人差がでてくる。従って集団教育が成り立たないという問題も起ってくる。

このように現実的にはあまりにも具体的な教材、あまりにも抽象的な教材が多く、それぞれの長所と短所とが目立つ。そこでバランスのとれた経験として双方の長所をかねそなえたものが要請される。

それらは性格的には半抽象教材であり、その位置としては具体と抽象のはざまにあるという点で「中間文化」と呼んでいいだろう。

私たちは、それらの領域に人形劇、影絵、幻灯、紙芝居、そして絵本を位置づけたいと考えている。つまり、具体的すぎず、抽象的すぎない、双方の性格をかね持つ。

まず人形劇は、喜怒哀楽を抑止した平均的顔に、演技――セリフやしぐさ、音楽などを加えることにより、涙をながさない人形が涙をこぼしたと思い、笑わない人形が笑ったとイメージし、想像して楽しむ教材である。頭にも具体的なメーキャップがされた人形から、オブラスツォーフの人形のように、具体的なものは頭だけであとは想像によって楽しむ人形劇から、指や手だけで表現する抽象的な人形までいくつかの段階があるが、具体性抽象性というパターンは変らない。人形が具体的であればあるほど想像する領域は少なく、抽象的であればあるほど想像を必要とする。

影絵は、人形劇の人形より更に抽象的な形をし、横向きで扁平な黒い影の人形が単調に動くに過ぎないものの、また演技や光によってイメージを拡充させるが、当然人形劇より抽象的である。

次に紙芝居は、絵本と同様に絵によって形の原型を正確に伝えるが、勿論静画であるために動かない。そ

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

れが説明文を演者がドラマチックに語ることによって動かない絵が動いていると想像する。

それに対し、紙芝居の具体的な上演とことなり絵本は、単に文章を読むことによって動かない絵が動いたと想像する教材である。

その点絵本は、中間文化＝半抽象教材の領域では更に抽象的存在であるといえるだろう。

絵本は、絵と文章によって構成され、それぞれ一つでは独立した意味をもたないもので、文章だけでは完全に表現し得ない、絵だけでは意味をもたないものである。絵は、形と色とその量によって描かれているため非常に具体的な視覚をもったものであり、文章は文字によるため非常に抽象的であり、静画に文章を読む活動により動かない絵が動いたと感じ、想像することによって絵が動き、頁をめくることにより動きが連続してイメージをつくる。それぞれ構成要素に必要なものが集まってanother world つまり『もう一つの世界』をつくっている。

絵と文章が重なることにより、絵の世界でもない、文章だけでのイメージでもない『もう一つの世界』を想像して楽しむものが絵本といえる。

絵本の絵と文章について中川が『絵本と子ども』('66.5.1.福音館書店)で、絵本の絵は描こうとするものの本質を正確に捉えたもの ― いわば対象の真実を表現したもの。あるいは、絵の補助によってのみ、ものの理解ができなかったところから、だんだん自分の頭の中の想像的映像 ― イメージによって理解し、たのしむ能力を身につけていくと述べているように、静画である具体的な形と色を見て、イメージの原形がつくられるわけであるから、構図、背景や色彩などさまざまな工夫がなされるのは当然であろう。

また文章に関して、物語発展の原因にならない重要でないものは削除すべきであり、物語展開に必要最小限のことばによって構成された文章が必要と述べているように、絵をみれば理解できるものは、重複して文章で描かなくてもいいわけになる。

つまり、絵で表現できないものや心の変化、時間の経過などは文章の方がより効果的に表現できるであろうし、文章でのみ表現できることを文章で書くことが必要であろう。こういう点で半抽象性の代表的なものであるといっていい。しかし絵本もまた、具体と抽象とのかねあいにより必ずしも同じ段階のものばかりでない。抽象的要素の強いもの、或いはそれに対して具体的分野の濃厚なものも存在するのは観察できるとおりである。開くと立体絵本や、音楽が演奏されるものや、匂いのでるもの、絵自体にからくりが仕掛けられ動くものなど、種々公刊されている。

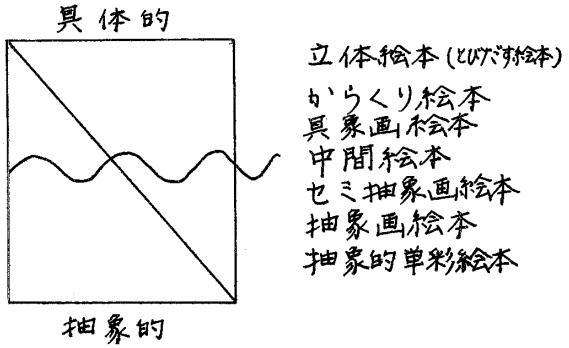
また、絵自身も自然主義的な写実の要素の多い『ちいさいねこ』(石井桃子作・横内襄画)や、写真による『よるのびょういん』(谷川俊太郎作・長野重一写真)のような種類も多い。

一方、抽象的要素の多いものも当然数多く存在する。

まずモノクローム絵本というものであろう。エッツの『もりのなか』やバートンの『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』のごとく黒一色のものから、マックロスキーの『かもさんおとおり』のごとく単色の絵本などである。

これらは、あとで論じられるとおり、想像力を刺激するためにモノクロームとしたのではなく、むしろ色彩を必要としない内容であるといっていいが、やはりカラー写真や写実的な絵に比べると、想像的補助を多く必要とする部分が多いことは確かであろう。また画風にしてもアブストラクト、セミ・アブストラクトを使用しているもの ― インドの絵本作家ラマチャンドランの『まるのうた』などがその好例であろう。

このように、半抽象的でありながら、段階的に抽象と具体の度合いが変わることを図示すれば、次のとおりになろう。



以上でもわかるように、半抽象教材や中間文化と性格づけはできるものの抽象性と具体性の組合せの度合いによりさまざまな段階がみられる。

私たちは、あらゆる意味で絵本を画一的に理解するのではなく、近来の多様化の状況を柔軟に受けとり、捉えながら考察していかねばならないだろう。

しかし、文学作品につけられたさし絵の絵の量が、一般の絵本のように多いために、一見絵本として位置づけられることは妥当ではない。

それらは、単に絵本様児童文学作品であり、いわゆる絵本とは、本質的に別のものであると考えるべきである。これは勿論絵本様児童文学を否定するものではない。

NII-Electronic Library Service